エゾライチョウ

有沢 浩

エゾライチョウのオス

エゾライチョウのメス

最近、野にあるままの自然の姿の野生動物が、テレビをはじめ新聞、雑誌などに紹介されることが多くなり、広く一般の人々に親しまれるようになってきましたことは自然保護を切望する私達にとって、ほんとうによろこばしいことだと思います。

自然の状態が良く保たれている東京大学北海道演習林では、一万一千ヘクタールにおよぶ大鳥獣保護区の設定(昭和四十三年)を機会に、自然保護思想啓蒙の一環として野生鳥獣の生態研究にスポットを当て、全職員が一丸となって調査・観察をつづけています。

そのかいがあり、本年はNHKの〃自然のアルバム〃撮影班および教育テレビ〃野鳥撮影班〃が来林し、二週間にわたってエゾライチョウを中心とする林内の野生鳥獣の取材に当り、一部はすでにブラウン管を通して茶の間に送られたのであります。

北海道の雄大な大自然の中には野生の動物がすこぶる多く、とくに森林にはいればその感が深く、動植物との対話に時の過ぎるのも忘れてしまうほどです。

職種上、レンズをかつぎ、マイクを片手に林内を歩くことの多い私は、動物達のユーモラスな場面に出あわすことがたびたびありますが、ここに拙文ながら北方固有の鳥・エゾライチョウの生活ぶりを紹介し、一人でも多くのナチュラリストの誕生に役立てればと考えペンをとりました。

。

動物達でにぎやかだった春夏とはうって変わり、北海道の冬は死んだように静まりかえってしまいます。大地は雪に埋もれ、昆虫達はすべて冬ごもる。鳥達の多くは南に去り、わずかに、とり残されたように冬鳥と留鳥だけになってしまうのです。そんな彼らは、吹きすさぶこがらしや、凄まじい吹雪のつづく、長く、きびしい北海道の冬と闘いつづけなければなりません。エゾライチョウもこんな野鳥の仲間なのです。

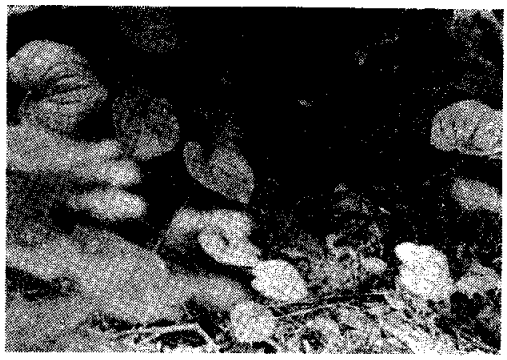
日本では北海道にしか生息しないエゾライチョウは、北方系の珍しい野鳥といわれています。しかし本州中部の高山帯に生息するライチョウと、ごく近縁な鳥なのですが、じつはひどい差別待遇をされている哀れな野の鳥でもあるのです。なぜならば、ライチョウといえば野生鳥獣の中でも保護色の見本とまでいわれるほど季節によって羽毛が完全に変色(夏季は褐色・冬季は白色)し、生息地の環境に良く適応した、野の鳥としてはまたとない自衛手段をもっているうえに、特別天然記念物として手厚く保護までうけているのです。

一方、エゾライチョウはと申しますと、まず冬季における保護色をもちません。半年近くもの長い北海道の冬を、自らを守るなにものももたず、いつも雪原に反対色の身をさらし、危険を感じながらほそぼそと生活していかなければならないのです。もちろん、天然記念物などという名誉ある肩書きなどもちあわせません。それよりもなによりも、彼らにとって致命的なのは、北海道における有数な猟鳥とされていること

なのです。

北方の生活に適応していることといえばただひとつ、冬になると足にたくさんの羽毛が生え、これがカンジキの役目をはたし、足が雪にしずまないようになるくらいなことでしょう。しかしこのカンジキの効用は、意外に大きなものといわねばなりません。それは彼らの生活の舞台が、主として地上にあるからなのです。冬季はもっぱらノブドウやサルナシなどの漿果を常食としているのですが、これらは匍匐性の強い植物なので、どうしても雪上を歩かねばならないのです。

ひとたび餌場にありつくと、雪中に穴居をつくり、餌が無くなるまでそこをねぐらとするのでしょう。春になり雪が消えるとそんなところには糞が一か所に山と積まれているのを、しばしば見ることができるのです。



抱卵するメス親

エゾライチョウは冬期になると、群れをつくって生活しています。普通は十羽くらいですが、一月から三月ころになると二十羽から三十羽を越える大群をつくることが多くなります。群れていることによって敵の接近をいち早く察知できるし、ときには敵を防ぐこともできるのです。また餌場の発見も一つの目よりも、多くの目のほうが有利といえましょう。それともうひとつ、群れることの重要な意味があるのです。それは集団見合とでも申しましょうか、まじかにせまった繁殖期にそなえて、お気に入りの配偶者を射止めるには、またとないチャンスともなるのです。

。

彼らの繁殖期は比較的早く、まだ残雪のある四月ころともなると、完全に一夫一婦の生活にはいります。そして新緑もあざやかな五月なかころには産卵を終え、抱卵にはいっているのです。

エゾライチョウの巣は、やや乾燥して下草の少ない混交林内にあり、立木や伐根の根もとなど、地上のくぼみに落葉を敷き、自分の羽毛を混じたごく浅い皿形の巣をつくります。そして、その中に七個から九個の卵を産むのです。

抱卵は夫婦共同形ではなく、メスだけがおこない、オスはまったく関係しません。抱卵中のメスに危険が接近してもなにひとつ警戒しないばかりか、一般鳥類に見られるテリトリー・ソングもほとんど無いのです。

一方、抱卵中のメスは驚くほどの落ちつきようで、人間が手で触れるほどまでに接近しても微動だにせず、決して巣を離れないばかりか、その精悍なつらがまえに、かえって私どものほうが遠慮せざるを得なくなるほどです。

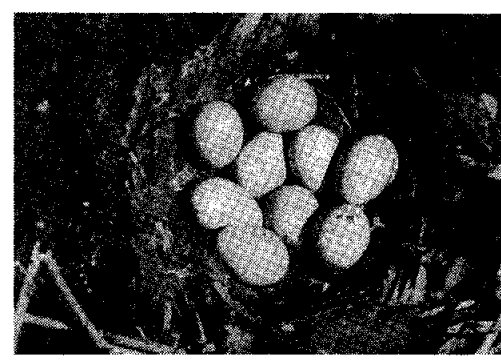
メスのこのような落ちつきはらった態度をどう解釈して良いものか、いまのところ判断にくるしんでいるのですが、人間的解釈をゆるしていただけるならば、私はこう考えるのです。

まず第一には、自己の羽毛の迷彩さに最大の自信をもっているのではないでしょうか。

林床にある彼女の羽毛（褐色に灰色を混じています）は、地上の色彩と酷似していて、その存在はまったくわからないのです。

こんなことがありました。それはNHK撮影班を案内し、抱卵するメス親を撮りに行った時のことです。現地に到着し、巣の場所を四～五メートル先から指でさし示したのですが、生態写真専門のカメラマンにさえそれを確認できないのです。

〃特徴のあるあの樹木の根もとですよ〃とノートに書いて説明し、どうにかわかっていただけたかと思ったのですが、結果的にはそれでも確認されていなかったのです。といいますのは、当のカメラマン氏、やおらその巣に近づいたかと思うと、ことにもあろうに巣のすぐ横でドッカリ坐り込んでしまったのであります。近くで見ている私は、気が気ではありません。指で×印の



エゾライチョウの巣卵

サインを出しても、当のカメラマン氏は不思議そうな顔をしているだけで、ピンときていないのです。やむをえず、小声で〝あなたのすぐヨコ〟とささやいて、初めてそれに気がつき、ネズミをとるネコのような動作で、巣から離れるという一幕があったのです。

おわかりのように抱卵中のエゾライチョウは、眼下にありながら、しかも専門のカメラマンの目にさえはいらないほどの、みごとな保護色の持ち主なのです。

もう一つは、危険がせまっても微動だにしないことなのです。

先の話でもおわかりのように、いかに完璧な保護色の持主でも、それが動きのあるものであれば、その確認は案外容易なのですが、決して動かないのです。

巣立つエゾライチョウのヒナ

このような保護色と習性は、彼らの種族の繁栄にいかに役立っているかははかり知れません。なぜならば、林内ではおよそ地上ほどぶっそうなところはないからなのです。キツネ、タヌキ、イタチ、ヘビなどは地上生活者であり、上空には猛禽類がいるなど、彼らにはあまりにも多くの敵がありすぎるのです。このような外敵から身を守る手段として、前記した保護色と習性がいかに役立っているか、おわかりいただけると思います。

このように勇敢にして英知あふれるメス親は、延々三週間余もの長い間抱卵に専念し、ヒナの誕生を迎えるのです。七羽から九羽の孵化は思ったより一斉におこなわれ、およそ二〜三時間ですべて誕生してしまいます。

間もなく親鳥の羽毛の下から、タリ色の可愛らしいあどけない顔をのぞかせはじめますが、はじめて見る大自然の異容さにとまどってか、すぐ羽毛の下にもぐり込んでしまいます。こんなことを幾度かくり返すうちにだんだんと馴れ、おそるおそる親鳥の体によりそって遊ぶようになり、勇敢なヒナなどは親鳥の背に上がって母親の顔をしげしげと見つめ、何やら語りかけているようで、ほんとうに微笑ましい情景を見せてくれます。

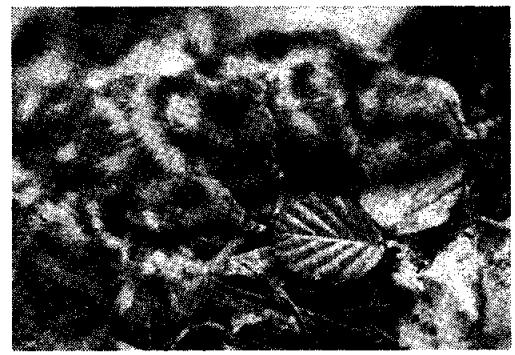
エゾライチョウのヒナは生まれながらにして、タリ色の羽毛につつまれ、眼も開き歩くこともできるのです。孵化後、十時間も経過するころになると、ヒナ達はじっとしておらず、巣の近くを思い思いに遊び回りはじめるのです。こんなとき親鳥はやおら立ち上がり、ゆっくりと巣を離れ、ヒナを伴い、いずれともなく叢中に消えて行きます。一般の鳥類でいう巣立ちなのです。このように孵化後、間もなく巣立つという現象は、外敵の多い地上に営巣する多くの野鳥に見られる一つの重要な適応なのです。

巣立ったヒナは数日もするとその活動も活発となり、敏速な足どりで地上を駆け回り、五〜六メートルぐらいの距離を飛べるようになっています。

一方、メス親は抱卵期とはうって変わって警戒心が強くなり、危険が近づくと擬傷（親鳥がいかにも大けがでもして、それほど遠くまでは逃げられないのだと見せかけて、敵を〝ゴマカス〟という、人間界でいえば、さしずめ知能犯的な手口）しながら地上を駆けめぐり、ヒナが避難するのを待って樹上に舞い上がり、冠羽を逆立て、尾羽を扇のように開いて、ピルル……、ピルル……。と警戒をつづけるのです。

私はこんな場面に出あったことがあります。それは六月中ころの大変暑い日、昆虫採集に林中へ出かけた時のことでした。林道の曲り角にきたときです。前方三十メートルほどのところで、エゾライチョウが羽にけがでもしたかのように、地上をころぶようにかけめぐっているではありませんか。私は近づいて見て驚いたのですが、そこには、一メートル以上もあろうと思われる黒々としたヘビが鎌首をもたげているのです。とっさに足がすくみ、そこに棒立ちにさせられてしまいました。これが幸いして、エゾライチョウの勇敢な母性愛を見るチャンスにであったわけなのです。

親鳥はいかにも大けがでもしたかのように、ヘビのすぐ近くからころぶように、のたうつようなかっこうで遠ざかっていきます。ヘビの注意力を自分にひきつけておいて、ヒナ達をヘビから守ろうとするのでしょう。遠くまで行ってはまたもどり、二回も三回も同じことをくり返すのです。擬傷にヘビも驚いたのか、まったく不動なのです。親鳥は擬傷が通じないと見たのか、今度はヘビすれすれに低空滑走をはじめました。これも二回、三回と、まるで自分の危



巣立ち数日後のエゾライチョウのヒナ

険などおかまいなしに、ヘビに体当りでもするかのように……。そのうちにヘビはついに危険をさとったのか、そそくさと叢中に姿を消してしまったのです。

が、今度は私に攻撃を加えはじめたのです。すぐ眼前をうなりをあげて通過したかと思うと、地上に降り、例の擬傷をはじめたのであります。

私は親鳥には目もくれず、近くの叢中にひそむヒナを探しました。誕生まもないヒナは足元の岩石の蔭に一羽、倒木の下側に三羽、林道脇の叢中に二羽と、いずれも互いに接近したところで発見することができましたが、そのヒナ達の隠れ方がおもしろく、すべて〃頭かくして尻かくさず〃なのです。しかしその色彩は地表の色と良くマッチし、じっとして動かず、一声も鳴かないのですから、なかなか発見は困難なものでした。

こうして母親の献身的で、慈愛にみちた保護のもとに生長するヒナは、紅葉も美しい秋ごろには立派な成鳥となり、群れの生活にはいって行くのです。

。

エゾライチョウは分類上、鶉鶏目の鳥でいうなればアヒルやニワトリとそう遠くない血縁関係にあり、性質も温和で人なつっこい野の鳥なのです。秋ごろなど、彼らが好んで生息する谷間の傾斜地で、オスの鳴き声をまね〃ピーピッピッピ〃と一種独特の調子をつけて笛を吹くと、〃バタッ・バタッ〃と大げさな羽音をたてながら枝から枝へと飛びうつりながら少しずつ近よって来て、ものめずらしそうに私どもをながめはじめるほどの愛すべき野鳥なのです。

また紅葉の美しさにさそわれて林内を歩いていると、足元から突然〃ガタッ・ガタッ〃と金属音をともなった、重々しく、はげしい羽音をたてて飛び立ち、しばしば驚かされることがありますが、すぐ近くの枝にとまり決して遠くへは逃げようとしません。しかしこのように大げさな羽音をたてて自分の存在を明確にし、ハンター達の恰好の標的となることを知りながら、なぜ遠くへ逃げようとはしないのでしょう。じつは、もうこれ以上は飛べないのです。それは、永い地上生活に馴らされたものの当然の退化からくる肉魂（まるまると太っています）と、翼のアンバランスからきているのでしょう。しかし、私はこの羽音をこんなふうにも考えたいのです。

彼らは空をかけることに生命をかける鳥類の誇りを、たとえ命を賭けてでも決して失うまいとする、最後のあがきにも似た哀歌のようだ……と。

。

これまで書きつづってきましたように、エゾライチョウは弱点ばかりをもち合わせ、ほとんど自衛手段をもたない森いちばんの哀れな鳥なのです。このような哀れな野の鳥をハンター達はなぜねらうのでしょう。私は狩猟とは〃スポーツ〃であろうと解しています。樹上にやすむ無防備、無抵抗の彼らをねらうなど、およそ狩猟家と称するものの風上にもおけぬものではないでしょうか。

ヨーロッパにもエゾライチョウの近似種が生息し、猟鳥となっていますが、ハンター達はおもしろ味に乏しいとして、動きの敏捷な近縁種との交配を試みていると聞きます。北海道のエゾライチョウが年々その数を減じている現実から、ヨーロッパのこんな考え方を少しでも早くとり入れ、ハンターもエゾライチョウも共存できる日の、一日も早からんことを念じつつ拙文を終わることとします。（東京大学北海道演習林）

§

〔エゾライチョウ〕鶉鶏目、エゾライチョウ科、中形の鳥。北海道と樺太にだけ分布し、周年生息する留鳥。

オスは灰色で、黒褐色と赤褐色との斑をよそおい、額から眼先、眼の下を通り喉下方に連なる白帯が顕著。この白帯で区切られた腮と喉は黒色である。メスはオスに比し赤褐色を帯び、腮、喉は淡褐色で小黒斑がある。顔にはオスに見る白帯を欠き、わずかに下喉に不鮮明な白帯が認められる程度。

純然たる山林の鳥で、主として地上で生活する。平地の森林から高山のハイマツ地帯まで生息するが、里山の混交樹林帯には特に多い。

別名エゾヤマドリ（ヤマドリ）ともいわれているが、本州に生息するヤマドリ（キジ科）とはまったくの別種である。